

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 252 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2018.4.18

—藤森著『日本の近代建築』の分析—第 18 回

話：三沢浩

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド第13回(スライドXIII)

■ 寺子屋 252 は 5 人の参加で開催されました。

■ 「木造モダニズム」は、過去からの分離を志向したヨーロッパ・モダニズムとは位相を違えて、過去からの継承や風土性を見失わないようにしながら、それらを科学的合理性を基軸に構成し直していく、そんなプロセスをもち得たものとして位置づけられるのではないかと思います。それは、明治期からの「近代建築」において、後藤慶二の「構造」やレーモンドの RC 打ち放しにみる「素材」といった個々の取り組みに込められたモダニズム的視線を初めて総合し、建築として実現した「モダニズム」、より普遍性を持った「近代」思想を全的に体現するものとしての「モダニズム」の到達点の一つだったのではないのでしょうか。

■ レーモンドの 5 つの原則「単純、正直、直截、自然、経済的」は、そうしたモダニズム思想の根幹を表しているものとしてあるように思います。

新建・寺子屋(モダニズムの研究) 252

2018 年 4 月 18 日(水)

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

—藤森著『日本の近代建築(上、下)』の分析—第 18 回

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド 第 13 回(スライドXIII) 話：三沢浩

1. 前回のスライドXIIへの補足

1) 日本大学大川三雄グループの研究

(SD特別号 2000.09「木造モダニズム 1930-50」)

2) 白井晟一と四国の松村正恒の作品が欠落、今井兼次も

3) レーモンドに片寄ってしまったことへの反省

2. 今回のスライド 13 について (A.R. 自邸と当時の木造住宅デザイン)

1) 「レーモンド・スタイル」とは何であるか、「(筈町の)麻布の自邸」から

2) 戦前の「夏の家」から戦後の木造モダニズムの確立

3) レーモンド・スタイルとは所員のつけた「名」(通称)のこと

4) レーモンドは木造の「和魂洋住」を実践していた

3. 当時、木造住宅をつくるためにも「レーモンド・スタイル」が有効だった

1) 環境との一体化と南面開放の原則を徹底

2) 床の土間コン、アスタイル、壁は合板釘打ち、天井あらかし(構造骨格共)

3) 外壁は杉のたて板、オイルステイン、屋根は鉄板(瓦棒又は立ちばせ)

4) 5 つの原則は、単純、正直、直截、自然、経済的

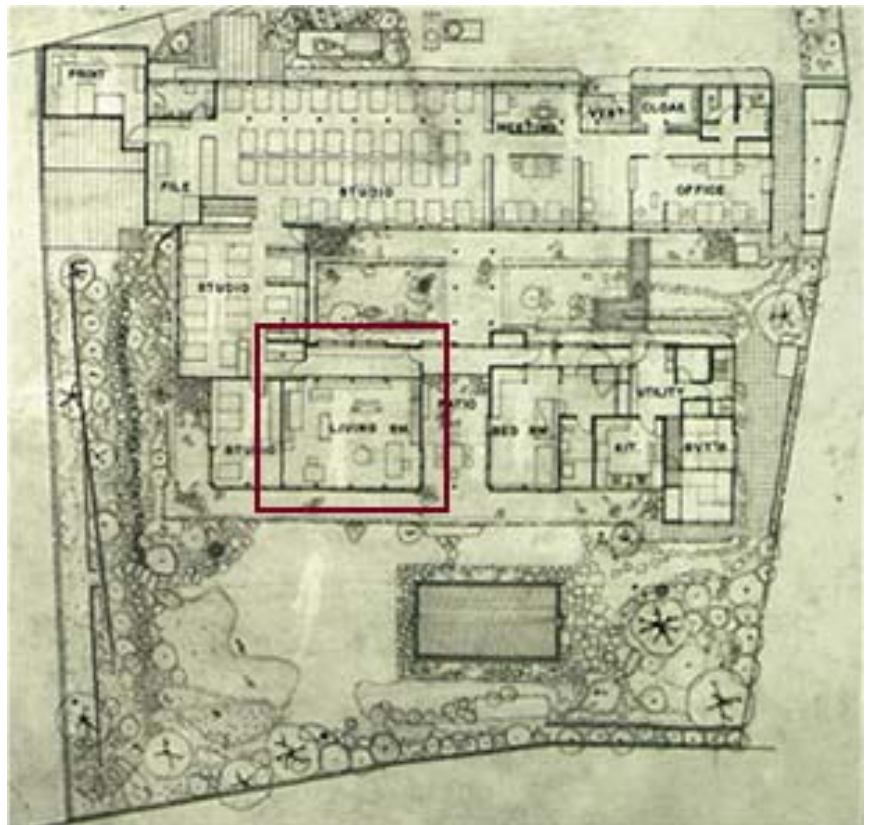
4. これらを徹底するためにレーモンドは戦前から所内の「一貫体制」を

1) 戦前は 20 人の事務所で外注せず、一切を徹底した

2) 「基本—実施図、構造、設備、積算、監理、内装、家具」まで

3) 戦後も同じように外注せず、内部でレーモンドが直接指導

4) 「一貫体制」によって設計の徹底と方法論を進め得た



次回 <寺子屋 253> ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

藤森照信著『日本の近代建築』の研究—第 19 回

話：三沢浩

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド 第 14 回

2018 年 5 月 16 日 (第 3 水曜日定例) PM 7:15~

場所：新宿区水道町 2-8 長島ビル2階(江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費：400 円 問合：大崎元 (有)建築工房匠屋 VED03705@nifty.com